

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 23 日現在

機関番号：13601

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2016

課題番号：26560381

研究課題名(和文) 大学生に向けた学部別特性を反映した「包括的性の健康学習プログラム」の構築と評価

研究課題名(英文) Construction and evaluation of "the health learning program of the comprehensive sexual education" according to the university student

研究代表者

山崎 明美 (YAMAZAKI, Akemi)

信州大学・学術研究院保健学系・講師

研究者番号：60299881

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：人生の根幹に深く関わる「性の健康」の学習機会が大学生に十分に提供されていると言えないことから、「性の健康」学習の現状をシラバスから把握し、「性の健康」各カテゴリーに関して、4学部2・3年生を対象に実態を調査した。有効回答290名、回収率20.1%。

学生は大学生になり、性に関する保健・医療サービス、法律や社会サービス、男女の心のちがひ、予防接種等、性に関する現実的な知識を学びたい意思が認められ、少数だが悩みや相談を要望する学生やDV等の体験があると懸念される学生の存在が示唆された。今後は現実的・効果的な「性の健康」学習・対処への支援を提案し、具体策の実現に寄与したい方向である。

研究成果の概要(英文)：A learning opportunity of the comprehensive sexual health for the university student is limited in Japan. So grasped the present conditions of the learning of the sexual health from a silabus. And about each category of the sexual health, carried out an investigation of the actual situation of that students, 2or3 grade of 4 departments. Result :290 effective answers, recovery 20.1%.

A result, the student became a university student, and the intention that wanted to learn knowledge about the nature practically such as a sexually transmitted disease, urgent contraception, medical institution information, family planning and a married life, life plan or a career plan was recognized some other time, and it was few, but the student who requested a trouble and consultation was recognized. I suggest support to realistic effect-like "health learning of the sexual health" and will be the direction that wants to contribute to the realization of the concrete measures in future.

研究分野：性の健康教育

キーワード：性の健康 性教育 大学生の性 健康学習 次世代育成 生きる力

1. 研究開始当初の背景

(1)わが国では、4年生大学進学率が47%を越え、短大・専門学校を加えると70%の高校卒業者が進学する時代を迎えた。しかし、『義務教育諸学校における性教育の実態調査』(2005年、文部科学省)等々を経て、性教育の内容や時間数、性教育担当者などの課題が指摘されてきた。義務教育以降の「性教育」では、生殖や性行動が中心となる傾向が強く、断片的な知識の理解のままになりがちであった。

(2)その後、「保健」学習においては、生殖や性行動にとどまらず、人間関係、自己実現、発達課題、結婚生活や性情報への対処などが文科省の学習指導要領にも掲載されるようになり、包括的な健康学習に変化してきた。しかし、特に性に関する教育の実施は、熱意のある教員が一部を提供するにとどまっている。

(3)大学においても同様な状況がある。大学生が生殖や性行動に限定されない包括的な「性の健康」を備え、判断力・選択力・実践力を高めることは「生きる力」の獲得に欠かせないが、「性の健康」学習を体系的・継続的に提供するには一般教員が担う部分の拡大が必要であり、性的個別性のある学生や問題を抱える学生などへの個別支援も十分とは言えない。性的関係における対人スキルが不足し、危機管理知識等の無さが持続する状況も散見されてきた。

(4)対応方法として、すでに組み込まれているカリキュラムに追加して、カリキュラム数を増加することは、学生の自由かつ創造的な時間を減らすことになり、かつ、大学の経営と教職員の負担の点からも、新たな科目設置と専門家が教育するという従来型の教育手法での対応は現実的ではない。そこで、すでに実施されている様々な授業の中で展開される授業内容および「性の健康」に関わる内容に、どのように統合や追加をして、学生の自主性を引き出す教育手法を駆使して、わかりやすいプログラムにして提供するか、というモザイク統合型の「包括的性の健康教育プログラム」による教育方法を確立することが、現実的な「性」とその周辺事象への学びを深めることと、肯定的に「性」を捉えて、思考・判断・選択することに効果的であると考え、本研究を実施した。

2. 研究の目的

大学生が生殖や性行動に限定されない包括的な「性の健康」を備え、判断力・選択力・実践力を高めることのできるための教育提供として「包括的性の健康学習プログラム」の構築を検討、モザイク統合型という新しい形の教育プログラムを構築

する。そのため、

(1)人間関係論や倫理学など、科目に散在する「性の健康」に関連する学習内容の分布実態を把握する。

(2)それらを受講する学生の認知とニーズを明らかにするため、本学の3学部の学生および教員に、性の健康にかかわる理論・技術項目と到達度および提供状況、自己効力感や性行動・性意識に関する実態把握調査を実施する。その後、大学生向け「包括的性の健康学習プログラム」を検討し、試験的な実施および評価を目的とした。

表1：言葉の定義：「包括的性の健康」

3. 研究の方法

(1)「性の健康」学習の現状の把握

自己効力感、人間関係	恋愛および性的な関係を結ぶ相手との良好な人間関係のためのコミュニケーションスキル、ネゴシエーション、アンガーマネジメント、メディエーションなど、自己効力感や尊厳
セクシュアリティ	セクシュアリティ(性・性別・性的指向、性的障害等)、性行為、生殖器の健康
性行動	行為に関わる予防接種および癌や病気の予防、予防接種や感染症予防を含む妊娠・出産に必要な健康管理、不妊症や不育症、妊娠・出産に伴うできごと
倫理	キャリアプランやライフプラン、医療に関する組織や社会資源の活用、性行動と法規定
性の裏側	性被害予防と対処、倫理、性を取り巻く事象(売買春、人身取引、女性性器切除等)
有益な価値の明確化	CLARIFICATION EXERCISES 自己への自信や自尊心、自己効力感を高める実践的なトレーニング、脳科学や認知療法を取り入れた研修など
さらに深い学習	性分化疾患や性同一性障害、ポルノグラフィ、ペドフィリア、性的虐待、DV

調査期間：2015年～2017年5月

対象：本学の文系・理系の4学部および
共通教育、参考として医学系学科のシラ
バス（講義概要・授業計画）を対象とした。

各学部に調査研究の趣旨を説明し、学部
のシラバスを収集した。そのシラバスの内
容を分析した。

分析方法は、調査対象学部のシラバスを参
照、まず、「包括的性の健康」学習に関連
すると考えられる科目を抜粋した。その科
目のシラバスに掲載されている講義各回
の内容が「包括的性の健康」の各カテゴ
ー一覧表中、該当する場合、1項目1点と
してカウントし、分類・整理して全体の傾
向を把握した。

(2) 本学学生の「包括的性の健康」に関す
る現状調査とプログラム評価

対象：文系・理系の4学部の2・3年生
調査時期

調査実施：2016年4月～6月。

データ整理・分析：2016年7月～2017年3
月

調査方法

新学期ガイダンスおよび科目ガイダンス
の学年全員が集合する機会を利用し、調査
への協力依頼および研究同意に関する説
明書の配布、自記式調査票を封筒に入れて
配布した。

また、学部の状況により、学部に調査票配
布を委ねる際は、口頭で伝える説明文を記
載した用紙を作成し、それを口頭で読み上
げてもらうようにした。

調査票と共に、封筒に記載用ボールペンを
封入した。

回収期間は10日間とし、各学部の日常
的に学生が利用している鍵付きレポート
提出ボックスへの投函とした。回収期日前
に回収状況を確認し、各学部の事務部の協
力を得て、学生への一斉メールで、アンケ
ートの提出の督促を行った。

倫理的配慮として、各学部に調査の趣旨
を書面と口頭で説明し協力依頼の機会を
設けた。学生には調査用紙の配布時に、倫
理的配慮の説明を行い、回答の記入と提出
・回収をもって調査への同意とすることを
伝えた。

調査内容

- ・背景：性別、年齢、学部、学年
- ・過去の性教育経験の認識、現在学びたい
性の健康学習内容、希望する教育方法等
- ・日常的な交友状況、学外活動状況
- ・性的指向、性的行為の経験
- ・性のイメージ、DV条件の知識等
- ・自己効力感尺度（GSES）による自己効力
感

⑤分析方法

回収したデータについて SPSSversion19
を用いて、年齢、性別、交流頻度等を従属
変数として分析した。

包括的性の健康学習プログラムの一部を
導入した試験的授業の実施及び評価を実施
した。

・調査結果から導き出された、学生が希望す
る性の健康学習項目と、自己効力感に関わる
項目を導入した内容の講義を計画（90分）。

・1年生の共通教育科目で試験的に実施、授
業前後で自記式無記名調査を実施する。

倫理的配慮

信州大学医学部医倫理委員会の承認を得
て調査を実施した（申請番号：2015-724 承認
日：2015年10月6日）。

4. 研究成果

(1) 本学における「性の健康」に関するシラ
バス（学習計画）からの分析

表2 包括的性の健康とシラバスの関連

	A	B	C	D
A.自己効力 感、人間関係				
1. 恋愛	37	3		
2. コミュニケーション スキル	26	7		8
①ネゴシエーション	4			
②アンガーマネジメント	6			3
③メディアエーション	8			
3. 自己効力感	33			8
	114	10	0	19
B.セクシュア ルティ				
1. 性・性別・性的指向	69	13	6	2
2. 性的障害等	3		4	2
3. 性行為	23			
4. 生殖器の健康	34	2	9	
	129	15	19	4
C.性行動				
1. 予防接種・癌・病氣 の予防	29			
2. 妊娠・出産に必要な 健康管理	6			4
3. 不妊症・不育症			1	
4. 妊娠・出産に伴う出 来事	38	4	3	6
	73	4	4	10
D.倫理				
1. キャリアプラン・ライフ プラン	35	4	2	11
2. 組織・社会資源	70	6	6	14
3. 性行動と法制的	12		3	3
	117	10	11	28
E.性の裏側				
1. 性被害予防と対処	16			4
2. 倫理	28	4		6
3. 性を取り巻く事象 ①売買春 ②人身取引 ③女性生殖器切除	15 6 1 5	1		6
	71	5	0	16
F.有益な価値 の明確化				
1. 自己への自信・自尊 心	24	0		14
2. 自己効力感のトレー ニング	19	0		8
3. 研修(脳科学・認知 療法など)	9	0		
	52	0	0	22
G.さらに深い 学習				
1. 性分化疾患、性同一 性障害	2	4	11	
2. 女子グループ		2		
3. 恋愛の男女の違い	20			
4. ホルノグラフィ				
5. ベドフィリア	4			
6. 性的虐待	6			
7. DV	32	6	11	0
	43	1		1
H.その他				

対象とした文系・理系4学部の4学年すべ
てのシラバスの授業計画と内容を確認し、包
括的性の健康に関わると考えられる内容を
抜粋した。そして、包括的性の健康の各項目
の一覧表に、授業内容と性の健康が関連す
ると考えられた場合を「1」として数値化した。

この結果、全体の傾向としては、性の健
康に関する授業内容は、共通教育に多くが配

置されている傾向が確認された。各学部教育においては、特に2年生からは専門的な科目が増えるため、人の生活や文化に関わる内容が少なくなる学部・学科の教育内容においては、性の健康に関する内容は非常に少ないか、見当たらなかった。

今後に向けて：専門科目の講義計画は過密であり、それらの中に性の健康に関する内容を組み込むのは現実的ではない。共通教育における健康科学、社会や人の生活、文化などに関連する科目、および専門科目の中から、性の健康に関連する内容がどう点在し、これらがどのように性の健康に関わるのか、という、いわば性の健康を基点とした全体像を示すことで、性や生き方の学びの導線を共通認識にしていけることが次段階の課題と考える。

(2) 性行動・性意識に関する実態把握調査結果概要

・4学部の2・3年生への配布総数 1437名、有効回答数 290名、回収率 20.2%、学年別回収率は2年生 23.4%、3年生 17.9%

・回答者の性別：(n=290名)
男子学生 131名(45.2%)、女子学生 158名(54.5%)、その他1名(0.3%)

・学年：(n=290名)
2年生 141名(48.6%)、3年生 149名(51.4%)
学生自身に関すること：(n=290名)

「何でも話せる友人の存在」「よく話をする同性の友人」「過去1年間、何らかの悩みを抱えた」「1日あたりの友人とのメールの数」については性別による影響はなかったが、「よく話をする異性の友人」の有無には性別が関連していた。家族との会話の頻度は「ごくたまに話した」「話をしなかった」で88.3%を占める。一人暮らしの学生が多いためと考えられる。

「1日あたりのメール数は、回答者の62.3%が5通未満だったが、10-19通、20通以上の学生も各1割ほどいた。

ほとんどの学生は交友関係を持っていると推測できるが、「過去1年間に抱えた悩み」については回答者の88.9%が「ある」と回答しているため、悩みの内容によっては、必要に応じて早期の対応に繋がることが望ましいと考える。

性に関すること：

1)自分が自認する性的指向(n=277名)
「異性」239名(86.4%)、「同性」2名(0.7%)、「両性」10名(3.4%)、「決められない」4名(1.4%)、「わからない」19名(6.6%)、「その他」3名(1.0%)であった。

2)性行為の対象(n=277名)

「性的な関係を結びたい相手は、「異性」251名(86.6%)、「同性」3名(1.0%)、「異性と同性の両方」8名(2.8%)、「決められない」3名(1.0%)、「わからない」10名(3.4%)、「その他」2名(0.7%)であった。

3)交際や性行為等の経験

「現在(調査実施時点)の交際相手がいるのは、97名(33.4%)で、その97名の交際期間は6か月未満は27.8%、6か月以上-1年未満は18.6%、1年以上-2年未満が29.9%、2年以上が23.7%だった。

「過去1年間の性交の相手の有無」(n=278)では、いる学生は92名(33.1%)、いない学生は186名(66.9%)、男女では、性交相手がいる男子学生は30名(23.8%)、女子学生は62名(40.8%)、²検定ではp値0.003と有意差が認められ、過去1年間の性交の相手の有無、つまり最近での性交経験に男女の差異があると示唆された。

加えて、「過去1年間の性交の相手」が「特定の1人」だったのは、92名中88名(95.7%)、「特定の複数」「不特定の複数」だったのは4名(4.4%)だった。

その他の性に関すること

1)性のイメージ：(n=267)

回答者が持っている「性のイメージ」は、概ね肯定的な傾向と解釈できる。「恥ずかしいこと」という捉え方は男女で有意差があった。この回答者数の結果のみで断定はできないが、「楽しいこと」「気が進まない」かどうか、男女の感覚に相違の傾向が示唆されている。

イメージ	男子 名(%)	女子 名(%)	P
楽しいこと			
そう思う	110(80.0)	99(69.7)	0.054
思わない	25(20.0)	43(30.3)	
大切なこと			
そう思う	107(85.6)	127(89.4)	0.342
思わない	18(14.4)	15(10.6)	
軽いこと			
そう思う	13(10.4)	18(12.7)	0.562
思わない	112(89.6)	124(87.3)	
恥ずかしいこと			
そう思う	63(50.4)	100(70.4)	0.001***
思わない	62(49.6)	42(29.6)	
いやらしいこと			
そう思う	72(57.6)	78(54.9)	0.661
思わない	53(42.4)	64(45.1)	
自然なこと			
そう思う	101(80.8)	122(85.9)	0.261
思わない	24(19.2)	20(14.1)	
気が進まないこと			
そう思う	27(21.6)	43(30.5)	0.100
思わない	98(78.4)	98(69.5)	

Peasonの²検定 実数(%)

*p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

2)デートDV、それに繋がる経験 (n=280)
 今回の設問では、調査時点でのDV被害の経験を確定することはできないが、DVに繋がるとされている行為や、性被害に繋がる懸念のある行為を受けている学生が少数存在することがわかった。少数であっても看過することはできない事象である。

経験の有無	男子 名(%)	女子 名(%)	P
交際相手からの スマホチェック			
経験あり	17(13.5)	13(8.4)	0.174
経験なし	109(86.5)	141(91.6)	
友人関係への過干渉			
経験あり	16(12.7)	15(9.7)	0.433
経験なし	110(87.3)	139(90.3)	
精神的苦痛			
経験あり	12(9.5)	21(13.6)	0.288
経験なし	114(90.5)	133(86.4)	
性行為の強要			
経験あり	2(1.6)	9(5.8)	0.068
経験なし	124(98.4)	145(94.2)	
身体的暴力			
経験あり	1(0.8)	3(1.9)	0.418
経験なし	125(99.2)	151(98.1)	
交際相手以外からの じろじろ見られた			
経験あり	1(0.8)	16(10.4)	0.001
経験なし	125(99.2)	138(89.6)	
言葉によるからかい			
経験あり	3(2.4)	18(11.7)	0.100
経験なし	123(97.6)	98(69.5)	
公共の場で触られた			
経験あり	4(3.2)	17(11.0)	0.013
経験なし	122(96.8)	137(89.0)	
性器を見せられた			
経験あり	5(4.0)	9(5.8)	0.474
経験なし	121(96.0)	145(94.2)	
性的行為の強要			
経験あり	1(0.8)	4(2.6)	0.257
経験なし	125(99.2)	150(97.4)	

Peasonの²検定 実数(%)

*p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

⑤ 学びたい性の健康の内容と教育方法： (n=273)

包括的な性の健康に関わる28項目について、「詳しく学びたい」「学びたい」「学びたくない」「全く学びたくない」の選択回答を得た。この結果を「学びたい」「学びたくない」に2分してみると、学びたい項目はトップから、「保健・医療サービス」204名(75.0%)、「男女のこころの違い」204名(74.4%)、「法律や社会サービス」201名(73.9%)、「性的接触に関わる予防接種」198名(72.8%)となった。

また、「学びたくない」と多く回答された項目は、「男性性器の仕組み」177名(65.1%)、「自慰」167名(61.4%)、「性器の

構造」165名(60.5%)であった。

学びの方法については、「講義」形式で「専門家から」学びたいという傾向があった。そのほか、「同性のみで」学びたい傾向があった。具体的な数値は次のとおりである。「専門家から」228名(78.6%)、「講義」220名(75.9%)、「同性のみで」208名(71.7%)、「教科書の使用」164名(56.6%)、「ビデオ視聴」158名(54.5%)。人数形態では、「学年全体」148名(51.0%)、「気の合う仲間数人で」142名(49.0%)を約半数が希望しており、「5,6人のグループ」や「10-20人のグループ」はどちらも60%以上が「好まない」を回答した。

< 結論 >

本結果は、S大学の調査対象学部生の約1割の学生の回答であるため、全体の傾向とは言えない。回収率からも、回答者は性に関する事柄に関心が高い集団とも考えられる。今後は、学生の生の声を収集し、全体集団とターゲット集団、個別へのアプローチを整理した「性の健康」の学びや対応の体制整備が必要と考える。

回答の対象は、限定された集団であり、その集団の傾向として、性についてはおおよそ肯定的なイメージを持っており、性に関する学びへの関心も、大学生になり、改めて現実的に性に関する知識を学びたい意思があると推測できる。学生の性の学びへの希望を踏まえて、学びのハードルを低くする環境を整備する必要がある。加えて、基本的な知識が十分理解できていないことも懸念され、学生の希望に沿いつつ、包括的な性の健康学習の環境整備に際しては、さらに詳細な調査結果分析と学生や学習提供側の生の声を確認していく必要が示唆された。

特に、本調査から少数ではあるものの、デートDVや生被害に繋がるような経験がある学生や、いわゆる性的マイノリティに該当する学生がいると考えられる。全国的な性に関する調査結果でも同様の傾向は様々報告されている。この少数については、ハイリスクアプローチとして、個別の相談が可能になるような形態を整備する必要があると考える。現時点では、性に関する「専門的な」相談体制は確立されていないため、既存の相談対応部署とも連携する必要がある。学内への調査結果報告を行い、検討に繋げていく。

5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計2件)

1 山崎明美、大学生の「性の健康」とその学習への意識の現状および支援の方向、第26回日本健康教育学会学術大会、2017年6月25日、早稲田大学早稲田キャンパス、東京・新宿区

2 山崎明美、大学生の「性の健康」およびその学習への意識の現状、第29回日本性感染症学会学術総会、2016年12月14日、岡山コンベンションセンター、岡山・岡山市

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山崎 明美 (YAMAZAKI, Akemi)
信州大学・学術研究院保健学系・講師
研究者番号：60299881

(2) 研究分担者

金井 信一郎 (KANAI, Shinichiro)
信州大学・学術研究院医学系(医学部附属病院)・助教
研究者番号：10617541

奥野 ひろみ (OKUNO, Hiromi)
信州大学・学術研究院保健学系・教授
研究者番号：60305498

五十嵐 久人 (IGARASHI, Hisato)
信州大学・学術研究院保健学系・准教授
研究者番号：90381079

高橋 宏子 (TAKAHASHI, Hiroko)
信州大学・学術研究院保健学系・准教授
研究者番号：80195859

石田 史織 (ISHIDA, Shiori)
信州大学・学術研究院保健学系・助教
研究者番号：20710065